

山と博物館

第37巻 第3号 1992年3月25日

大町山岳博物館



墓 標

『彼岸』近き日の午後 写真と文 上條光則

南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏

大町山岳博物館より南に下る道を約百メートル行くと、そこには仏様たちが静かに眠って居られる墓地公園があります。

お彼岸も近づいた或る日の午後、ぼかぼかと暖かい日和に誘われて、妻と連れ立って散歩がてらお墓参りに出かけました。

ひと頃は一面の銀世界だったのに、あちこちすっかり解けてきて、仏様たちも、

「もうすぐ彼岸だね」と言っている気配。
……………

『人生の岐路』は全く不思議なもの……。
辰野の学校より転勤の時、校長先生は、麻積小と大町小の二校に交渉して下さい、

「先にOKが来た学校に行くだぞ」と。
かくして初めての土地大町へ!! 以来三十年余の大町生活。家を新築し、娘を市内に嫁がせ、おまけに墓地も購入。平成元年には石塔を建て、仏様の戒名と共に私共まで戒名を授与して戴き、石に刻んであるのです。

今にして思えば、あの時もし麻積に決まっていたならば、どのような運命に変わっていたのかと、考えても不思議な人生の岐路でした。
……………

我が家の仏様をねんごろに拝んだ後、何枚かシャッターを押した中の一枚がこの写真ですが、私ども夫婦も年と共に仏様の世界に近くなつた故か、お墓参りはよくします。それに国の内外の古寺古仏を訪ね、その思い出もいっぱいありますが、その中でも特に、お釈迦様が菩提樹の下で悟りを開かれたというインドのブツダガヤで、妻と一緒に般若心経を一心にと念えた時のことは忘れられない感激として深く心に残っています。

我が家のお墓は、アルプスの眺めの大変よい所にあります。いずれは此処が永遠の住み家となる訳ですが、時々墓から首を出して、

「アルプスにまた雪が来ましたねえ!!」
なんて眺めることもあるでしょうか?

(大町市在住)

街にタヌキがやってきた

山口 佳秀

神奈川県秦野市での生態観察をもとに、土地開発によって減少する生息域にただ手をこまねいているだけでなく、側溝、下水溝などをけもの道として利用し、積極的に住宅地に出没し始めたホンダタヌキのことを報告して早いもので7年になる(文献1)。

この傾向は予想以上のスピードで、丹沢、箱根の山麓にある新興住宅地はもとより、横浜、川崎市のごく一部の市街地を除く県下全域にまで広がっている。また、小田原市や藤沢市、相模原市、大和市、座間市、川崎市、横濱市など県内のほとんどの市町村から「証誠寺もびつくり、タヌキ12匹。庭賑わす。」などとマスコミをにぎわすほど餌づけされる個体群も多い。そして今日では、都市周辺部から、人口密集地に僅かに残る孤立林へとより生息域を拡大する傾向がみえる。

自然乱開発時代における生息域の消滅、農業農業全盛時代の農薬禍などの悪夢から解放され、やっこの思いで地獄から這い上がり、改めて都市型動物としての地位を確保したかのように指摘され出したタヌキの現状と、こんな都会派タヌキの未来は明るいのか考えてみたい。

都会派タヌキは残飯頼り

20年程前、人々の間ではまだタヌキに関心が薄かった頃、東丹沢山麓の神の川産のいわゆる山地のタヌキと鎌倉市十二所、鎌倉霊園付近の人里にすむタヌキ2個体の胃内容を

分析したことがある(文献2)。山地性のタヌキには、カジカガエル、カマドウマ、サルナシ、クサボケ、カキ、ツチグリなどいかに生息環境を特徴づけるかのごとくの食性であった。一方、人里のタヌキには小豆、カマドウマ、カマキリ、クサボケなどが認められ、霊前の供え物を摂食するなど人為的な食物にかなり依存していることが推察できた。

その後、一九八八年二月と四月に座間市栗原の県道で輪禍によるタヌキ2個体を入手し胃内容を調査する機会を得た。

調査といっても、新鮮な標本ではなかったため詳細な分析は不可能であったが、1個体からはソーセージ、パンと思われるデンブン質状のものを確認した。また、残りの個体の胃内容物の大部分は不明物であったが、その中にご飯粒を認めることができ、いずれのタヌキも餌づけ用に供給された食物、あるいは家庭残飯を利用していたことが推察され、都会派タヌキの食性の一端を垣間見ることができた。

そんな折、川崎市青少年科学館が市内に生息するタヌキの生態調査を実施し、タヌキの食物の大部分は人間の出す残飯に頼っているという、都会派タヌキの食性を顕著に表す報告が出た。一九八八年三月から九〇年にかけて川崎市内で収集したタヌキ25個体の胃内容を分析した結果、残飯類は年間を通じて常に5割以上の高い割合を示した。特に冬期に

は他の食物は出現しておらず、残飯のみが出現しているという。残飯の中身は、ご飯粒、ニンジン、ネギ、トウモロコシ、ソーセージ、豚肉、ウメボシの種、タマゴの殻であった。また、ビニール、ゴム、発泡スチロール、アルミ фольドール等も出現しており、この分析結果から都市周辺部のタヌキにとつて残飯類が最も重要な食物となつていると考えられるという内容であった(文献3)。

一般的にいわれている野生動物の栄養サイクルは、実りの多い秋期に多量の餌を摂食して皮下脂肪を蓄積し、冬期の餌の不足する時期に消費しているといわれる。

だが、都会派タヌキには、生活排水に含まれる残飯、ゴミ置き場の生ゴミ(特にビニール袋に入った生ゴミは、野良ネコによつて袋が破かれ、ネコが食べ散らかした残りやタヌキが利用するのを秦野市で観察している)、家庭菜園で栽培される季節の野菜、餌づけによって供給される食物や時にはネズミ、昆虫、ミミズなど本来の餌?を採食するなど、年間を通じて供給される食物量に変動がない。そのため、栄養サイクルに変化が生じ、その結果がタヌキの繁殖力、個体群の増加の一つの要因になつていられると思われる。

都会派タヌキ受難の図

(その1) 多発する輪禍死

神奈川県では一九九〇年度約5万件、死者565名を数えるなど全国の死亡交通事故ワーストワンの深刻な事態が続いているが、野生動物においてもこの傾向が認められ、続々と交通事故で死んでいる。

一般に野生動物の交通事故の多くは、新設

種別	1985年	1987年	1989年
キチ	2,583	3,966	5,910
ヌタ	446	688	1,030
イウ	1,341	1,717	1,950
キネ	240	262	451
シノ	13	5	22
シル	8	13	36
カマ	18	25	33
トビ	1	4	4
ビス	1,127	1,291	1,768
ジラ	566	827	860
カキ	487	544	860
	276	358	683

表1 高速道路上で事故死した動物数 (日本道路公団調べ)

道路によって野生動物の行動圏が分断されるために生じることが多く、最も危険なのは新設早々の高速道路といわれる。近年、高速道路は土地高騰など人間本位の環境作りのため山の中に建設されることが多く、事故に遭う野生動物は急激に増加している(表1)。

県内の場合は、開発による生息地の分断が原因の交通事故ばかりではないようだ。

一九八〇年以前には、丹沢山塊の山麓部で年間2、3件の事故が報告されているにすぎなかった。ところが、一九八〇年以降県内各地でタヌキが目撃され出すのと時を同じくして、厚木市七沢、清川村、山北町などで交通事故に遭い道端で無残な最期を遂げているタヌキが報告され出した。そして、八〇年代中頃になると、秦野市、伊勢原市、平塚市、厚木市や、三浦半島の横須賀市、三浦市などから年間70〜80件の事故が報告されるなど、交通事故多発地域が都市周辺部に見られるようになった。



その後、八〇年代後半には交通事故に遭うタヌキは急増し、その現場も横浜市、川崎市、大和市、座間市など都市周辺部はもとより、より人口密集地に移動し出した。一九九〇年度、交通事故などに遭い保護されたタヌキは136個体(県立自然保護センターで65個体)になるといふ。これらは、事故に遭ったものの

側溝につけられたタヌキの足跡。蓋をあけるとタヌキがけもの道として利用しているかどうか調査できる。

運良く一命を取り留めて保護されたタヌキで、すでにあの世に旅立っていた個体は、哀れなままの姿で放置されるか運が良くても清掃局によって処分されてしまう。このような輪禍死のタヌキを含めると想像を超えた個体が交通事故に遭っているのではないかと。また、タヌキがとてもし息してはいそうもなような市街地の交差点で輪禍に遭う個体が多いのも特徴だ。

一九八〇年以降、急激に増加し出したタヌキの交通事故の原因は、限りなく進む車社会と、新設道路による生息地の分断、それに加えて適応力の強いタヌキが側溝、U字溝などを生活を支えるハビタットとして取り入れ、都市環境へ積極的に進出したためと思われる。(その2)

犬ジステンパー、フィラリア症など新たな戦い
今から7年ほど前、横須賀市在住の土岐獣医師から、三浦半島で交通事故に遭ったタヌキ32個体を解剖し、その内の数個体から犬糸状虫を検出し、液浸標本で保管しているものを見せていただいたことがある。その時獣医師は、近いうちにタヌキの世界にもこの病気が広まることを指摘していたが、最近現実となってきた。

県内では一九七五年頃、犬の恐ろしい病気のひとつ犬ジステンパーが丹沢山麓周辺で流行し、多数のタヌキが死んだという。その後は飼犬の予防獣医学が発達し、今やウイルスを病原体とするこの流行病も完璧に制御予防されるようになったといわれる。

最近、鎌倉市をはじめ各地から、タヌキの斃死体が頻りに報告されるようになり、横浜市立金沢動物園が死因を調査した結果、犬の病気のフィラリア症とわかったという。



側溝に入る前に道端でひと休みする若いタヌキ

私が秦野市で最初に観察した側溝を利用するタヌキ3個体は、昨年の夏に斃死体で発見され温室の脇に埋められていたことを隣人から最近聞いた。フィラリア症が原因かどうかわからないが、タヌキにとって恐ろしい犬の伝染病などの新たな戦いが始まっている。(その3)

放獣タヌキ、山に戻れず里に死す
県では、野生傷病鳥獣保護事業として、自然保護センターや、横浜市野毛山動物園、金沢動物園などを中心に、野犬に襲われたり、交通事故に遭いけがをした鳥獣を看護し、元気がなくなった個体は鳥獣保護区に放している。放獣されたタヌキがどんな行動をとるかを探ろうと、2個体の成獣に電波発信機をつけ追跡調査をした。その結果、2個体はすぐに町にまい戻り、1カ月もしないうちに交通事故などで相次いで死亡したという。

街のタヌキに思うこと
都市環境に溢れる残飯類などの安定した供給を求めて進出したタヌキは、都市型動物としての地位を確保したかのように指摘されている。確かにこのままの状態で行くれば「ドブタヌキ」の出現は時間の問題である。だが待てよ。
具体的な資料が乏しくまったくの推測の域を出ないが、街からタヌキが消える日はごく近くにきているように思えてならない。まして、都市近郊の山麓部に生息域をもつタヌキまでもが……。

7年前、私が住んでいる周辺では、側溝を利用するタヌキ以外にも多数のタヌキが生息していたが、現在では足跡を探すのも苦労するほどになってしまった。何が原因かは定かではない。

今、ワープロは新しい漢字を簡単に造ることができ。タヌキは深山よりも里近きを好んで棲息するためケモノ偏に「里」と書き狸という漢字になったという。今は、ケモノ偏に「街」をつけて呼ばせたらうが似合っている。そのうち、ケモノ偏に「探」をつけて、たぬきと呼ばせる日がごく近い将来に迫っているように思えてならない。

(引用文献)

- 1、山口佳秀 一九八八 神奈川県自然誌資料9号。
- 2、同 一九七六 神奈川県自然誌資料9号。
- 3、山本祐治 一九九一 川崎市自然環境調査報告2号。

(神奈川県立博物館)

大沢の石室について(後)

峯村 隆

信濃鉄道・今井五介の着眼点

信濃鉄道株式会社は明治45年3月、松本・大町間の軽便鉄道の開業をめざして資本金60万円で設立された。当初、社長には大阪の実業家、才賀藤吉が就任し、本業の才賀電機商会と工事契約を結んだ。ところが4カ月後に同商会は倒産。事態を受けて、製糸王、片倉兼太郎の実弟、今井五介片倉製糸松本工場長が社長に就任した。大正2年4月、ようやく松本市駅(現北松本駅)で起工式が行われ、大正5年7月に信濃大町駅までの全通をみたこの鉄道事業は、片倉製糸の資本と今井五介の主導力あつての実現だったという。(※4)

今井五介率いる信濃鉄道は開通当初から北アルプスと仁科三湖に代表される松本・白馬間の風光を誘客の資源として着目していたようである。信濃木崎夏期大学の開校(大正6年)にむけての献身的ともいえる援助、矢沢米三郎・河野鮎蔵を中心とする県下初の本格的山岳団体といえる信濃山岳会の創設(大正8年・母体は明治44年に発足した信濃山岳研究会)への協力、「日本アルプス案内」という観光・登山ガイドの継続的な自社刊行などにそれが表れている。

そればかりではない。「山岳」13―1(大正7年12月発行)の雑報で慎太郎は次のように述べている。「……黒部川の籠渡しに六月中に信野鉄道の後援で修理せられました。」つまり信濃鉄道は、登山客の誘致に関して

単に側面から働きかけるばかりでなく、登山ルートを整備という直接的な支援も行つたのであり、白馬岳とならび当時人気の高かつた針ノ木峠・立山のコースに着目していたことが推察される。

現在のところ信濃鉄道が大沢石室の建設資金を提供したという明確な資料は見つかっていない。だが、登山の普及にとりくむ石室の設計者、河野鮎蔵との利害は一致しており、結びつきも自然に思われる。また、実際に誰が工事にあたり、当初誰が管理したかも未だ不明である。少なくとも慎太郎が直接関与し



初期の大沢石室 百瀬美江氏所蔵

ていなかったらしいことは、燕山荘の創始者、赤沼千尋の次の一文からもうかがえる。

「私は大正十年、燕岳に小さな山荘を建てることにしたが、当時の山岳会からは異端視された。私はこのために日本山岳会を脱会したのである。親友の百瀬でさえも、山荘を建てることは山を冒瀆するものであるとして、暗に批難していた当時である。その百瀬を私が再三誘惑したので、ついに大正十四年あの気の強い百瀬も針の木に大沢小屋を建てることになったという次第である。」(※5)

今後調査を続けたい。

石室の運命

昭和2年の平村役場学務書類編冊には、6月1日付の「県営石室修理二関スル件」という文書がある。内容は、県が昨年同様に爺ヶ岳、針ノ木岳の県営石室の修理を平村に委託したい旨の通知である。

明くる昭和3年、平村は県知事から9月10日付で針ノ木峠と爺ヶ岳の県営石室の無償交付の指令書を受け(※6)、村議会は12月26日、両石室を村有財産として管理することを議決する。(※7)

ここに現われる針ノ木岳あるいは針ノ木峠の県営石室とは、明らかに大沢の石室である。いつどのような経緯で県に移管されたかも詳らかではないが、昭和4年のシーズンから村営石室として利用されるに至る。平村はこの年、従来の石室に加えて管理人居室兼炊事室も増築して、夏場の登山者の便をはかった。(※8)

だがこうしたサービスも長くは続かなかつたようで、昭和10年代の前半には夏場も無人となり、やがて修理も行われなくなって瓦解する。30人を収容したという石室の面影も、

今はもうない。

*4 「信州の鉄道物語」信濃毎日新聞社

*5 「山の天辺」赤沼千尋 東峰書房

*6 「学務書類編冊」S4 平村役場

*7 「平村会議録」S3 同

*8 「学務関係綴」S5 同

小稿をまとめるにあたり、丸山彰氏・長沢武氏・大日方健氏・佐藤貢氏・小平千文氏には特にお世話になりました。お礼申し上げます。(山岳博物館 学芸員)

博物館だより

特別展のご案内

○川口邦雄写真展 時の風物誌

4月19日(日)～5月10日(日)

山岳写真家・自然科学写真家として幅広い活躍をされている川口邦雄氏の県下初の写真展です。テーマは「時」。自然のスピードの中の連続したものとして「時」を見るとき、ものが新しい見え方をしてくるといいます。「時」という文法で読んだ地球の様々な表情を、第1部「山の自然・野の自然帳」、第2部「失われた時への旅(アメリカ西部・恐竜の昔)」の2部構成で紹介いたします。

訂正 先月号4P 2段目・扇↓扉 3段目・
受負↓請負 の誤りです。

山と博物館第37巻第3号

一九九二年三月二十五日発行
発行所 長野県大町市 TEL0261-221111
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
大糸タイムス印刷部
定価 年額 一,二〇〇円(送料共) 切手不可
郵便振替口座番号 長野四一三三一九三